

第2節 自然環境

第1 自然環境の役割

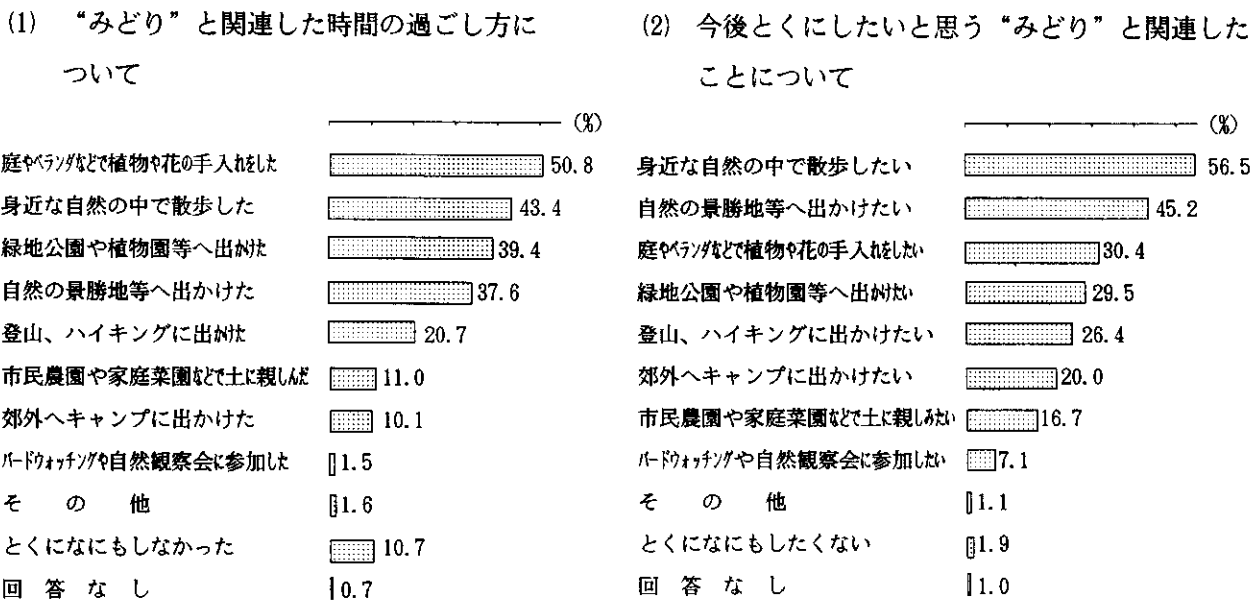
自然は、大気、水、大地、生物などから構成される複雑で精妙なシステムである。人間は生物の一つの種として、この自然環境に支えられているという基本的な結びつきのほか、自然から限りない恩恵を受けている。自然は森林や水の働き等を通じて、大気や水の環境調節、保水、水源のかん養、国土の保全など、人間の生活環境に不可欠で、かつ、かけがえのない役割を果たすとともに、森林、農地、海など素材生産の場を提供している。

さらに自然は、都市部におけるみどりの役割として期待されるように、やすらぎ、ゆとり、うるおいといった人間の営みに欠くことのできない要素をもたらしている。

自然環境が果たしてきた様々な公益的役割について、都市環境の保全・向上の観点からもさらに認識を深め、自然と人間の調和・共存という視点のもとに自然環境の保全等に一層努める必要がある。

“みどり豊かな大阪づくり”の一層の推進に向けて、みどりに関するいくつかの課題について府民2,000人を対象に世論調査（有効回収調査票数1,442(72.1%)）を実施したところ、みどりと関連した「時間の過ごし方」と「今後とくにしたいこと」について尋ねた結果は、次のとおりであった（1-61図）。

1-61図 みどりと関連した時間の過ごし方と今後とくにしたいことについて



資料：「第72回府政に関する世論調査（みどり豊かな大阪づくり）平成6年度 府民情報室」

第2 地 勢

1 地 質

大阪府は、三方を北摂、金剛生駒、和泉葛城の三山系に取り囲まれ、西は大阪湾に面し、淀川、大和川による沖積平野と中小河川沿いの丘陵・平野で構成されており、原始的な自然は少ないものの緑や水といった自然環境が身近にあるという面において立地条件に恵まれた地域である。

山地部の地質については、北摂山地の大部分は、中・古生層からなるが、茨木市から能勢町にかけて茨木複合花崗岩体が分布しており、碎石・マサ土の採取が行われている。金剛・生駒山地は大部分が領家花崗岩類からなり、北生駒は風化が著しく、標高も低いので、マサ土の採取による人工的改変地形が各所にみられる。

和泉葛城山地は、和泉層群及び泉南酸性火砕岩類からなっており、丘陵地帯は大阪層群、神戸層群及び段丘層から、沖積低地は沖積層からそれぞれなっている。

2 た め 池

府域には1万余りのため池が点在するが、その大半は堺市、松原市及び八尾市を結ぶ地域から南の方に集中して分布しており、他は淀川水系の水が利用できない生駒山麓及び北摂丘陵地帯に分布している。大規模なものとしては、久米田池（岸和田市）、光明池（和泉市）などがある（1-62表）。

1-62表 た め 池 の 状 況

年 度 \ 地 域 名	北 摂	大 阪 市	河 内 北	河 内 南	泉 州	合 計
平 2	2,106	6	2,503	3,544	3,639	11,798
3	2,106	6	2,497	3,540	3,638	11,787
4	2,105	6	2,442	3,528	3,633	11,714
5	2,105	6	2,383	3,527	3,600	11,621
6	2,104	6	2,337	3,522	3,582	11,551

(注) 数字は各年の4月1日現在のため池数を示す。

3 自 然 海 岸

自然海岸とは、海岸部が自然の状態を保持している海岸のことで、砂浜、泥浜、磯浜、転石浜、岩礁、及び河口干潟等の種類がある。府において自然海岸は、南部の泉南市・阪南市・岬町に存在し、泉南市と阪南市の境には河口干潟が、岬町には岩礁が見られる。

府の海岸線は、総延長距離が約260kmあり、このうち自然海岸が占める割合は、わずか1%程度に過ぎない（1-63表）。

1-63表 海岸の形状

(平成元年度調査)

	岩 礁	砂 浜	人工 海浜	緩 傾 斜 護 岸	消 波 ブ ロ ック 護 岸	垂 直 護 岸	合 計
自 然 海 岸	2.8 (1.1)						2.8 (1.1)
半 自 然 海 岸	3.2 (1.2)	7.0 (2.7)					10.2 (3.9)
人 工 海 岸			3.4 (1.3)	6.4 (2.5)	58.2 (22.4)	179 (68.8)	247 (95)
合 計	6.0 (2.3)	7.0 (2.7)	3.4 (1.3)	6.4 (2.5)	58.2 (22.4)	179 (68.8)	260 (100)

(注) () 内は%

(単位: km)

第3 植 生

大阪は、早くから文化が開け、多くの地域が活発な人間活動の場として利用されてきたため、自然植生的な樹林は、山地の山頂部、急傾斜地、境内地等にわずかに残っているだけである。

府域を冷温帯と暖温帯に分けるとその大部分が暖温帯に属する。暖温帯は古くから利用の対象とされており、その大部分は、市街地や造成地、田畑及び果樹園となっているが、山地から丘陵にかけては、代償植生(人間の影響によって、本来の自然植生が様々な人為植生に置き代わったもの)としてモチツツジ-アカマツ群集、特にアカマツ林が広く分布しており、次いでコナラ群落の主として生駒山地に、スギ-ヒノキ人工林が北摂及び金剛の山地に分布している。自然植生としては、アラカシ群落、サカキ-ウラジロガシ群落及びコジイ-クロバイ群落がわずかながらも社寺、古墳及び急傾斜地に残存しているほか、貴重なものとしては岸和田市の意賀美神社にミズバイ-スダジイ群落、堺市の美多弥神社にシリブカガシ群落等がそれぞれ残存している。

冷温帯の多くはスギ-ヒノキ人工林やモチツツジ-アカマツ群集などの代償植生に被われている。自然植生としては、妙見山及び和泉葛城山の山頂部にブナ林が残存しており、なかでも和泉葛城山のブナ林は国の天然記念物に指定(大正12年)されている。

冷温帯と暖温帯との推移帯(標高600~800mの地帯)にある高槻市本山寺などには、モミ、ツガの天然林が点在している。

また、淀川、大和川の河川敷には、ヨシ、オギ等が優占する湿原がある。

第4 緑被率

府域における緑被地は、府域面積の52.7%にあたる99,372haである。また、市街化区域内の緑被率は20.9%である（1-64表）。

1-64表 緑被現況

※（ ）は、樹林、樹木のみの緑被

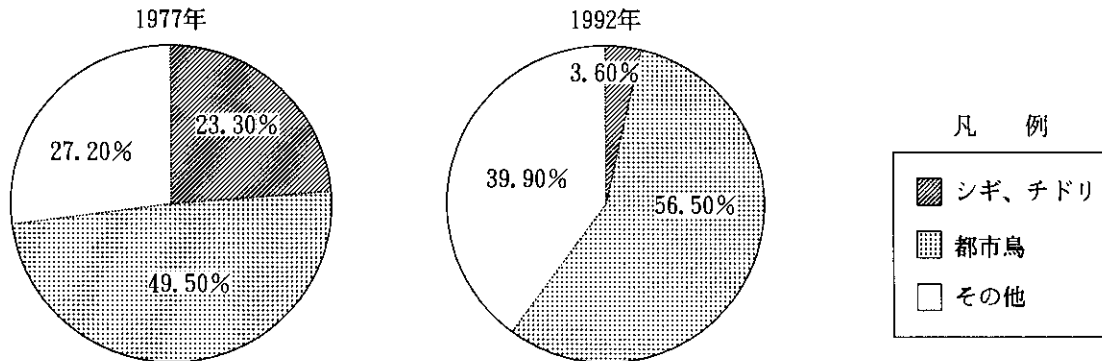
	区域面積 (ha)	緑被面積 (ha)	緑被率 (%)
市街化区域	90,085	18,847 (8,260)	20.9 (9.2)
市街化区域外	98,540	80,525 (61,895)	81.7 (62.8)
全 域	188,625	99,372 (70,155)	52.7 (37.2)

- (注) 1. 緑被地は、樹林・樹木に被われた区域、草地（芝地を含む）、農地、果樹園である。
 2. 緑被地の抽出、面積計測は、平成4年度撮影の空中写真及び地形図により行った。
 3. 市街化区域面積は平成3年3月末現在、全域区域面積は平成3年末現在（国土地理院）である。

第5 生息鳥獣

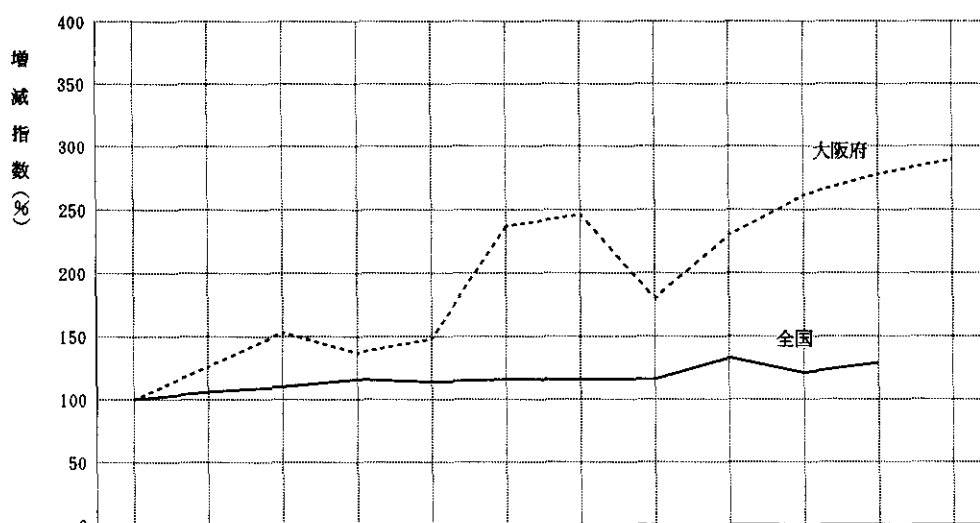
府域の野生鳥獣については、約30種の獣類と約270種の鳥類が確認されているが、各地域で生息する鳥獣の相は異なる（1-65～66図、1-67～69表）。

1-65図 夏期における全体に占めるシギ・チドリ類・都市鳥比率の変化



- (注1) 調査方法：府下41点において、夏期(1993年5月19日～7月20日)、冬期(1992年11月20日～1993年2月18日)に野生鳥類の生息状況を調査し、前回調査(1976年～1977年)と比較した。
 (注2) 都市鳥：スズメ、ムクドリ、ヒヨドリ、キジバト、モズ、ハシブトガラス、ハシボソガラスの合計とする
 (平成4年 大阪府緑の環境整備室調べ)

1-66図 カモ類の生息数の推移



調査年月	昭和59.1	60.1	61.1	62.1	63.1	元.1	2.1	3.1	4.1	5.1	6.1	7.1
全国	100	106	110	116	114	116	116	116	133	121	129	
大阪府	100	126	153	137	148	237	246	180	230	261	278	289

(注) 増減指数：昭和59年を100とする。

1-67表 ガンカモ科鳥類の生息地ベスト5の経年変化

調査年月 順位 (調査場所数)	昭61.1 (71か所)	平3.1 (157か所)	4.1 (165か所)	5.1 (176か所)	6.1 (187か所)	7.1 (199か所)
1	淀川全域 5,114	淀川全域 3,372	淀川全域 6,394	淀川全域 8,826	淀川全域 8,873	淀川全域 10,837
2	新日鉄堺 3,517	産廃処分地沖北 1,926	大和川全域 2,410	大阪市北港 3,795	大阪城公園 3,238	大阪市北港 3,809
3	産廃処分地北 1,135	大阪市北港 1,884	大阪市北港 2,408	大和川全域 3,379	安威川全域 2,810	安威川全域 3,178
4	仲哀天皇陵 916	日根野大池 1,289	南港野鳥園 2,153	南港野鳥園 1,761	大和川全域 2,301	平林貯木場 1,448
5	仁徳天皇陵 895	大阪城公園 1,132	大阪城公園 1,305	安威川全域 1,208	神崎川 1,771	大和川全域 1,430

(注1) 表中、上段は生息地、下段は羽数

(注2) ガンカモ科鳥類の生息調査は、毎年冬期に日本に渡来するガン、カモ、ハクチョウ類の生息状況を把握するために、環境庁の呼びかけにより昭和44年度から全都道府県が一斉に実施している。

1-68表 カモ類の種別順位
(平成6年度)

順位	種名	確認数(羽)	%
1	ホシハジロ	14,083	40.9
2	ヒドリガモ	5,325	15.4
3	ハシビロガモ	2,518	7.3
4	コガモ	2,429	7.0
5	マガモ	2,062	6.0
6	カルガモ	1,942	5.6
7	スズガモ	1,600	4.6
8	オナガガモ	1,533	4.4
9	キンクロハジロ	1,130	3.3
10	オカヨシガモ	815	2.4

1-69表 ニホンジカの生息頭数の推移

(単位：頭)

	昭54	57	60	63	平3
能勢地域 剣尾山 個体群	8~15	42~100	73~194	69~197	79~288
箕面地域 鉢伏山 個体群	12~35	21~76	42~118	21~98	調査せず
高槻地域 ポンポン山 個体群	4~10	10~24	15~53	11~46	〃
計	24~60	73~200	130~365	101~341	

(注1) 左の数字は最低確認数、右の数字は最大推定数を表示

(注2) 調査は、①オスジカ成獣の鳴き声調査及び②シカ生息地周辺の人々に対するアンケート調査の二方法により実施。

(注3) 平成3年の調査では②を生息域全域で実施したが、①の実施は能勢町地域のみであった。

(北摂山系)

箕面を中心に、アカネズミやモグラ、コウモリ等の小型哺乳類のほか、イノシシ、ノウサギ、テン等の中・大型哺乳類、合わせて22種の哺乳類が確認されている。

なお、溪流には貴重種であるカワネズミが、明治の森箕面国定公園には天然記念物のニホンザルが生息している。

鳥類については留鳥ではヒヨドリやシジュウカラ等が、夏鳥ではヤブサメやオオルリ等が、冬鳥ではツグミやアトリ等が、漂鳥ではルリビタキやアオジ等が確認できる。特に秋季の渡り期には、サシバ等のタカ類が大挙して渡るコースとなっている。

(金剛・生駒山系)

生駒山地は古くから人為の影響を受け、他の山系に比べ林層が乏しいため、生息場所は少なく、哺乳類については、ノウサギやヒミズモグラが広範囲に生息しているほかは、特筆すべきものはなく、また、鳥類については、留鳥ではウグイスやホオジロ等が、夏鳥ではホトトギス等が、冬鳥ではツグミ類やカシラダカ等が、漂鳥ではルリビタキやアオジ等が見られる。

金剛山地は、人為的な影響は他の山地に比べ小さかったが、植林等が進み、生息哺乳類相には影響がみられ、リスやムササビ等の小型哺乳類のほか、タヌキ等の生息が確認されている。一方、鳥類は多く、留鳥ではシジュウカラやエナガ等が、冬鳥では、ツグミやシロハラ等が、漂鳥ではアオジ等が見られ、夏鳥は府下で最も多く生息している。なお、ミソサザイ、クロツグミの府域で唯一の繁殖地である。

(和泉葛城山系)

生息環境に対する開発の影響は、奥山を持つ東部と、持たない西部とでは異なるものの、特筆すべきものはなく、哺乳類については、ノウサギやリス、イタチ等、いずれの山系でも見られる種が生息している程度である。また、鳥類については、留鳥ではシジュウカラやメジロ等が、夏鳥ではオオルリやホトトギス等が、冬鳥ではツグミやマヒワ等が見られる。なお、標高500m以上の地域には府域で最も大型のクマタカが生息している。

(平野・丘陵部)

哺乳類ではイタチ等が見られ、鳥類ではスズメ、ドバトが多数生息している。

また、春秋期には大阪市南港埋立地、泉南市男里川・榎井川河口の干潟にシギ、チドリ類が渡来し、冬期には仁徳天皇陵等の濠や淀川河川敷等に多数のカモ類が渡来する。

第6 森林・農地

森林は、単に木材資源供給の場としてだけではなく、土砂流出防止、水源かん養といった国土保全機能、大気や水の浄化、気候緩和といった環境保全機能のほか、人の心に潤いを与える保健機能等の公益的機能を有し、また、野生生物の生息地としての重要な役割も果たしている。

府域の森林については、南河内など生産性の高い林業経営が行われている地域を除いて資産保持的な傾向が強く、森林の他用途への転用により林野面積は漸減の傾向にある（1-70表、1-71図）。

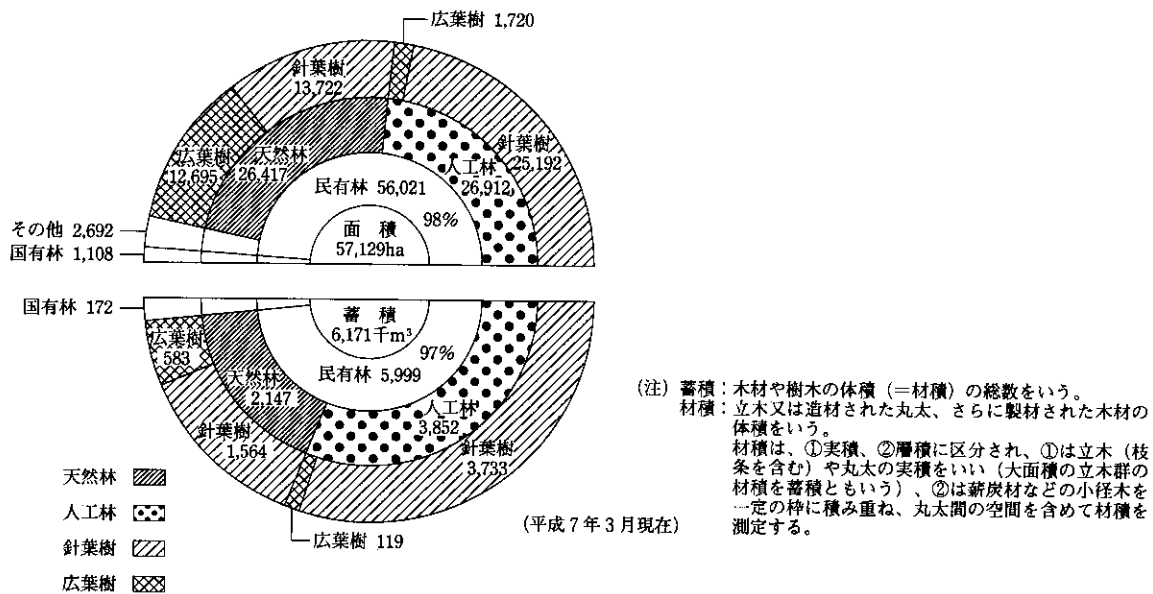
一方、農地は都市化の進展に伴い、毎年減少の一途をたどっている（1-72表）が、高度成長期の減少幅とくらべると緩やかになっている。

1-70表 森林面積の推移

（単位：ha）

			平 2	3	4	5	6
総	民	数	57,592	57,398	57,322	57,180	57,129
		有	56,461	56,267	56,191	56,049	56,021
		天 然 林	26,924	26,592	26,488	26,440	26,417
		人 工 林	26,760	26,933	26,962	26,917	26,912
		竹 林	1,283	1,280	1,279	1,260	1,260
		そ の 他	1,494	1,462	1,462	1,432	1,432
国	有 林	1,131	1,131	1,131	1,131	1,108	

1-71図 森林の比率



1-72表 耕地面積の推移

（単位：ha）

年	平 2	3	4	5	6
面 積	18,100	17,900	17,700	17,500	17,400

（注）1 数字は各年8月1日現在の状況を示す
2 近畿農政局調べ